

草庵仏教

第124号
(発行日)
2000年10月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638126 西宮市
小松北町1-2-3
電話・FAX(0798)
41-5346
(発行人) 土井紀明
メール naridoi.ne.jp@lycos.ne.jp
http://members.tripod.co.jp/souan211

《 聞法会ご案内 》

- * 同朋の会 (念佛寺)
22日午後2時
.....
- * 聖典講座(浜屋西宮店)
第1土曜日午後3時
- * 念仏座談会(念佛寺)
第3土曜日午後3時

fさんとの対話

f 「最近、孫の病気が縁で同居の嫁が変な宗教に入ってる困っています」
d 「どんなことを嫁さんは言いますか」
f 「亡くなった祖母の霊が苦しんでいて、この救われてない祖母の霊が家族の中で精神的に弱い孫に現れて、孫が病的になつていて。祖母の霊が救いを求めて孫にとりついてくる。だから孫の病気を治そうと思えば、救われてない祖母の霊を供養しなければならぬ。祖母の霊を供養するのと、よって祖母の霊も救われると。こんな事を言うのです」
d 「あなたはその話を聞いてどう思いましたか」
f 「ばかばかしくて話にならない。どうしてこんなまやかし宗教に入るのかと思つてなさけなくります」
d 「fさんは日頃よく真宗の教えを聴聞されているから、死んだ霊がどうのタタリがどうのという、そういう類の話にはついていけないのですね」

f 「ええそうなんです。何とかそんなまやかしの宗教をやめて、真宗の教を聞くようにと何度も話のですが、言うことを聞いてくれません。ほとほと嫌になつて、毎日嫁と顔を合わせるのも辛いのです。どうしたらいいのでしょうか」
d 「他者の考えや信念や信仰を変えることは大変難しいことですね」
f 「何度も話し合うのですが、嫁の考えは変わりません」
d 「自分の心や考えでもなかなか変えることは難しいので、すから、いわんや人の心や考えを変えることは実に難かしいことです。(匹夫もそのころざしを奪うべからず)というじやありませんか」
f 「そうですね。自分自身も簡単には変えられないのに、人の心や考えを変えるのは困難なことですね」
d 「実際この問題に手軽な方法は見つかりませんね。親鸞聖人も息子の善鸞さんが真宗の教をゆがめ、それを関東の地で布教されて、それを非常に心を痛められましたがおよばず」と自らの非力なことを述べておられます」
f 「また同行の方が聖人の仰せと相違した自力的な考えをもつておられることに対しても、こちらからおよばず」と述べておられます。例えばお弟子の随信房に宛てたお手紙の中に「御同行のおおせられようは、ころえずさうろう。それをば、ちからおよばずさうろう」と申されています」
d 「親鸞聖人でもですか」
f 「ええそうです。師の法然聖人もお手紙の中で「縁なき事、わざと人のすすめ候にだにも、かなわぬ事にて候(縁のないことは、人がいくらすすめてもかなわぬこと)と仰せられています、あの

法然聖人がお念仏をすすめても受けつけない人は沢山いたのでしようね」
f 「聖人様方も人の考えを改めたり、正しい教に導くことは人間の力のおよばぬ事が多いといわれるのですね」
d 「ええそうです。そして親鸞聖人は「そのところに、念仏のひろまりそうらわんことも、仏天の御はからいにしようべし」といわれ、その所に念仏がひろまることは人間の仕事だといわれるのです」
f 「仏法がひろまるのは仏様のおはたらきなのだということですね」
d 「ええそうです。それに、人の信仰を変えようとすると、に、私たちの心には人を正したい信心にちよつとでも早く導きたいと焦る気持ちがあること、気がつきます。焦りいらだつところには自我心があるといえます」
f 「どういうことですか」
d 「自我の心は、何事も自分の願望や期待を出来るだけ早く実現したいという気持ちにかられてしまします。自我心は、落ち着いて事が熟するのを静かに待つことがなかなかできないのです。万事についてさうです」
f 「私も待つことが苦手です。望んだような結果をすぐにはしがりません」
d 「分かり易くするためによく知られている歌で考えてみましょう」
f 「鳴かざれば 鳴かせてみせよう ホトトギス」という歌があります、自我の心が

現れています。また「鳴かざればトギス」というのは現実には随順しつつ、願いを持ち続けて、時が来るのをじつと待っているという歌ですね。これは自我を立てるのではなく、現実的に順う柔らかな心だと思えます。逆に、「鳴かざれば 殺してしまえ ホトトギス」というのは非常に強い自我の現れだと思えます」
f 「では私の場合、どうしたらいいのでしょうか」
d 「相手が間違つた考えや信念を離れてくれることに努力するにしても、焦らず無理強いをせず、彼女が誤つた考えを離れてくれるのをじつと念じて待つ、邪見をひるがえす時、きていくことではないでしょうか」
f 「常に念じながら待つのです」
d 「ええそう思います。正しい道理に基づくようにと念じつつ、見守りつつ、待ちつつ、しかもいろんな縁を通して正しい道理を彼女に示していくことだと思えます」
f 「(どう)か嫁がよこしまな教を離れて正しい教に帰依するように阿弥陀様よろしくお導き下さいませ」と念じつつ、縁あれば話し合うのです」
d 「ええそう思います。念じるといえば、私が念仏に帰依することになったのも阿弥陀仏が私に念仏を届けたのと、長い間念じ続けたいと、下さつたからだと思つています」
f 「私がナムアマミダブツとお

真宗問答(二)

念仏することになるには、長い間私を助けたいと念じて下さる阿弥陀様のご念力がかかっていけばこそなのですか

d 「ええそうです。池山栄吉さんの歌に「久遠この方子ゆえの回向 私ひとりをおもい」というのがあります、久遠劫来私を片想いに想って下さる阿弥陀様が、南無阿弥陀仏を与えたいと思いついて下さる、その思いが届いて、私が念仏させていただけです。それほどまでに私を待ち続けて下さったのです」

f 「人をなんとかしようと思いつているけれど、私自身が仏様に待ち続けられてきた身なのですね」

d 「ええ、ですから、それを通して、私たちも人が真実に帰するのを念じつつ待ち続けたいことですね」

f 「そうですね」

d 「それともう一つあなたの話から感ぜられることは、彼女が誤った信仰に入っていることに耐えられないあなたがいるのです。彼女が間違いをひるがえして欲しいというのも本当でしょうが、しかしそれによって「苦しい自分が早く楽になりたい」というあなた自身の都合が困っている、そのようにも感じるのですが」

f 「そう言われてみれば、確かに私の都合が困っていることも事実だと思います」

d 「自分を楽にしたいために相手の考えを自分の願ひ通りに変えたいと思う、そこにやはり自我心が出てくるように思ったのです」

あやしげな宗教に迷っている

あやしげな宗教に迷っている

る嫁と一緒にいるのがやりきれない、耐えられない、その自分の心に苦しんでいる。いわば嫁に苦しまされているよりは自分の心に苦しんでいる。嫁に期待をかけて焦っている心は自分自身を苦しめているのではないかと、自分を省みることも大切だと思います」

f 「そうですね。私は嫁の考えを変えようと、嫁ばかりを見て腹を立てていました、焦っている自分の心を振り返ることが大事なのですね」

d 「ええ、自分の中の自我心が返って、真宗が周りの人へ伝わる邪魔をする場合がよくあるものですね」

f 「私は熱心に仏法を人々に伝えて、人の誤りを正そうとするのだけど、私の中の自我心が頭をもたげてくると、返って仏法がひろまる妨げになるのですね」

d 「熱心が何時のまにか、こだわりになり、相手を圧迫してしまうことになり、うなる、相手は敬遠したくなるってききます。蓮如上人が『御一代記聞書』に「たとえ正義たりとも、しげからんことをば、停止すべき由候」とい

われ、たとえ正しいことでも、それをしつこく相手に主張することは止めよといわれています。それは自我を張ることになるからだと思います」

f 「そうですね。私が私の力で早く何とかして落ち着こうと焦っていたように思います。これからは、どこまでも如来様を中心にして、如来さまのお導きを主にしたいと思います」

(丁)

(丁)

(丁)

q 「前回の真宗問答一で、宗教は有限無限の一致であり、真宗では阿弥陀仏と私のでありであるといわれました。ではどうしたら私は阿弥陀仏にであうのでしょうか」

d 「実はどうしたら人は阿弥陀仏にであうことが出来るのかを長い間思索されたのは、凡夫の方ではなく、阿弥陀仏の方でした。この思索を阿弥陀仏の五劫思惟と申します」

q 「五劫とはどういうことですか」

d 「一劫はとても長い時間を表しています。それには幾つかのたとえがあります。例えば、四十里四方の大きな石があるとして、その石を百年に一度天女が天からおりてきてその衣で摺る、そうすると極くわずかであるがすり減る。百年に一度の割合で続けて、この巨大な石が全て摩滅するほどの長さを一劫というのである、と。まあ気の遠くなるような話です。五劫は一劫の五倍の長さです」

q 「どうしてそれほど長く考えなくてはならないのですか」

d 「それは、凡夫の力では阿弥陀仏にであうことが極めて困難だという理由が、一つにはあるのです」

f 「阿弥陀仏にであうために、私たちの側から行う修行は極めて難しいのですね」

d 「そういう修行を難行といえます。この難行を長期間続けることは誰にでも出来ることではありません。よほど優

れた人とか、辛抱強い人が修行を長期間していけばあえるかもしれないですが、それは極く限られた人だけのことです。その他無数の人たちはあうことはとても不可能なのです」

q 「なぜ私たち普通の者は不可能なのですか」

d 「無明煩惱が深く盛んであつて、心弱く放逸でしかも極めて愚かだからです。ですから私の方から阿弥陀仏を探し求めてあおうとするのは、丁度目の見えないうちが幼い頃に分かれた母親にあいたくて、(母をたずねて三千里)あいて行くようなものです。目が見えませんし愚かですから、ただうろろするばかりです」

q 「なるほど、愚かだから仏の真実をさとることができない。いわば真理を見る心の眼がつぶれているわけですね」

d 「ええ、親鸞聖人の和讃にも私どものことを「世の盲冥」といわれています」

q 「心の眼がつぶれて真理を見ることの出来ないものという意味ですね。だから凡夫の方から阿弥陀仏にであうとしてもあえないわけですね」

d 「ええそうです」

q 「じゃあ、阿弥陀仏にであう道はないのでしょうか」

d 「そこなんです。だから阿弥陀仏はご自分の方から凡夫の私たちにあおうとされたのです」

q 「なるほど、阿弥陀仏の方からあいにこられるのですね。ではどのようにしてあいにこ

られるのですか」

d 「阿弥陀仏はもとも色もなく形もない救いの働きそのものです」

q 「色もない形もないのちと慈悲と智慧かぎりなき働きである」と先回いわれましたね」

d 「阿弥陀仏は、愚かで煩惱深く、小さなものである人間にご自身を知らせたいと思ひ、言葉となつて私たちに名のり喚ぶことによつて私たちにあおうとされたのです。それが南無阿弥陀仏のお名号です」

q 「お聖教にはどのようないわれがありますか」

q 「正信偈に「重誓名声聞十方(重ねて誓うらくは、名声十方に聞こえんと)とあります。如来法蔵様は誓いを重ねて、名声をすべてのところの衆生に聞かせたいと誓われました」

名声とは名のりの声という意味でしょう。すなわち「阿弥陀仏の名のりの声」であります。それが南無阿弥陀仏の名号です。

阿弥陀仏が名のりの声が南無阿弥陀仏のお念仏の声。ですから私たちがお念仏にいて阿弥陀仏とであうのです。いわば如来法蔵様は南無阿弥陀仏の名となり声となつて私たちの上にご自身を現されるのです。それが、私たちが称えるお念仏の姿です」

q 「私たちの称えているお念仏は阿弥陀仏ご自身の名のりであり、私への喚び声である、それが念仏の本義なのですね」

d 「そうですね」

(丁)

(丁)

真宗聖典講座

念仏者は、無碍の一道なり。そのいわれいかにとならば、信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし。罪惡も業報を感ずることあたわず、諸善もおよぶことなきゆえに、無碍の一道なりと云々（歎異鈔第七章）

〈歎異鈔第七章第五講〉

今回は「諸善もおよぶことなきゆえに」を読みたいと思います。

諸善というのはここでは人間（凡夫）の側から為すもろもろの善行、善根の意味と言つてよいのでしよう。凡夫の行う善はおよそ有漏の善といつて、煩惱が混じっているから、善には違いがなくても不純な善です。

たとえば、大変だろからと思つて友人の引越を手伝つたとします。そうするとかく「彼にあげた」という恩着せがましい思いがくつきます。これが元になって、将来その友人が助けてくれなかつたら「あの時引越しの手伝いをしてあげたのに恩知らずな奴だ」と腹を立てる縁になりかねません。善をしたけれども、善に煩惱へしてあげたという自我心（が伴う不純な善ゆえ、それが元になつてまた将来煩惱（ここでは腹を立てる）を起こす縁になります）。

そういうような凡夫の善は、〈俺がした〉という自我心が大なり小なりひつつきます。こういう善を有漏の善といひます。私たちが行うもろもろの善はこの有漏善であります。

一方念仏は、無漏の善であります。親鸞聖人は念仏を「円融至徳の嘉号」とあるいは「真如一実の功徳の宝海」と言われています。ということは念仏のすなわち南無阿彌陀仏の名号は、仏の完全な真実の功徳です。念仏は仏の純粋な善であり功徳ですから、この大善大功徳の名号をただけで、それが私を正しく浄土に生まれしめる因となつて下さいます。正信偈にも「本願名号正定業」（本願の名号は正定の業なり）とありますが、本願の念仏は私を正しく浄土

に生まれしめる業因となつて下さるのです。いわば念仏は私を仏に成す因となつて下さるほどの大きな善なのです。なぜなら念仏の本質は仏徳そのものであり仏そのものだからです。だから、念仏をいただく人は仏になるのです。

それに比して諸の人間の有漏の善は、私どもを浄土に生まれさせる因には到底なりえません。ただその善なりの樂を結果するといわれています。

また念仏は「円融至徳の嘉号は悪を転じて徳を成す正智」（教行信證総序）といわれています。

過ぎた欲が起これば起これる心で愈々腹立ち心が起これば起これる心に念仏し、嫉む心が起これば南無阿彌陀仏とお念仏する。そうするとお念仏の心に照らされて、我が身の浅ましさを、醜さが照らし出され、知らされてきます。「おはずかしいこと、あさましいこと」と我が身が慚愧せしめられて、悪につつまれる我が身がセーブされてきます。そして、この浅ましき我が身を大悲したまひ、見捨て給わぬ仏心を念仏の上と感じさせていただくのです。こうした念仏の徳を転悪成徳と申します。

江戸の末期、石見の国（今の島根県）に善太郎（一七八二年—一八五六年）という妙好人がいました。ある日暮れ、一日の畑仕事がおわり、泥まみれになり疲れてやつと家に帰つてみると、嫁が風呂も夕飯の支度もしていませんでした。カッとなつた善太郎はそこにあつた薪を取つて嫁を打とうとしました。その時善太郎の口からナムアマダブツとお念仏が出ました。その念仏に照らされて「ああ鬼のような我が心よ」と、身をひるがえしてお内仏にお参りし、仏前に薪を置いて慚愧の涙をこぼした、と伝えられています。

金子大栄師が「念仏は自我崩壊の音である」といわれましたが、この話はそのような念仏のいわれをよく表していると思います。

日常生活の上で、ムツとするようなことを含めて、善太郎が腹を立てるような出来事は小なり大なりよくあるものです。そういう煩惱悪業が湧いてくる時、南無阿彌陀仏のお念仏が出てくださると、ふつと心の眼が我が身に向き、自分の醜さ、お粗末さが照らし出されることがよくあります。

すなわちお念仏は、念仏をいただいている人に、その人の悪を知らせ、悪を慚愧せしめて、悪にブレーキをかけ、更には悪をして弥陀大悲の恩徳をます

まず知らしめる縁に変えて下さいます。お念仏にはこのような徳があり智慧があります。ただ私たちは念仏の智徳のいたなきようが乏しいので、念仏の智徳が生活の上に十分に現れないのです。

転悪成徳の働きがある念仏に較べて、普通私たちの行う諸善には悪を転じる徳はありません。むしろ悪に妨害されてしまうのです。

生活に困つた人に金銭を施そうという善なる心が起これると、次には「いやいや、このお金が無いと買いたい物が買えなくなる」との惜しみ心の煩惱が起こつて、せつかく善心が起こつてもそれを妨害して、善をなさしめないのです。いわば悪は人間の行おうとする善に対立し、善を妨げるものです。

さらに諸善が念仏におよばない理由として、念仏が「善本」といわれるように、善を生み出す本という意味があります。枝葉が諸善とすると、枝葉を生み出す根のような関係です。しかも念仏から生み出されたもろもろの善はより浄らかな善だと思ひます。念仏は善を生み出す本というのは、仏説無量壽經に「この光に遇えば、三垢消滅し、身意柔軟にして、

歡喜踊躍し善心をここに生ず」とあつて、阿彌陀仏の光（念仏の光）にあえば善心が生まれるのです。阿彌陀仏のご恩にふれると、喜んで「お役に立ちたい」という善き思いが自ずから湧いてきます。これが善の本という意味だと思ひます。

念仏から出る「喜んでさせていただく善」は「仏のご恩にこたえたい」という満足心から生まれざる性質のもので、ところが普通の諸善は己の修行のためや義務や責任感からの場合が多く、「しなければならぬ」という善であり、時には見栄や名声や自己防衛—人という指さされぬように—からする善でもあります。こういう点においても、念仏と諸善の優劣の相違を知るので、

松並松五郎さんの歌

門かどに立たせさせた乞食さえ
永く待たせば気の毒や
久遠劫来待ち兼ねる
親を哀れと思わんか
親を哀れと思うなら
ああじゃこうじゃを振りすてて
南無阿弥陀仏となきやさんせ
親も助かる子も樂や

〔松五郎念仏の歌〕より〕

松並さんは多くの念仏の歌を残されました。その中でも私が最も心を打たれる歌の一つがこの歌です。こういう歌に解説してみたことを言うのは蛇足ですが、あえて感想のつもりで以下に述べてみます。

「門かどに立たせさせた乞食さえ 永く待たせば気の毒や」。昔、家の門のところは乞食がやってきて施しを求めて手を差し出して光景を見たことがありません。汚れた衣服をまといて、雨の中をカサもささずに家の前にたたずんでいる姿です。今でも、ときたま施しを求めて訪れる人がいます。そういう人に少しでも施しをしようとする奥に入りますが、そういう場合はなかなか誰も急がないものです。わずかなお金をあげるのですが、出し急ぎはしなない。随分またせつやつと小銭を差し出すだけなのです。いかに乞食とはいってもながながと外でつつ立って待ち続けることは辛いものです。

雨の中、ずぶぬれになってじっと待ち続け、立ち続けている乞食。その姿を見て、松並さんは阿弥陀様の姿を思っ涙を流されているのだと思います。なおここには、松並さんの、恵まれない人に対する温かいまなざしがあることも同時に感じられます。松並さんは身よりのない子を何人も引き取って面倒をみられたお方でもありました。

さて、家の玄関先でじっと立ちん坊で待ち続けている乞食、その姿は阿弥陀様が久遠劫来、私たちにあいたまい、私を助けたいとナムアマダブツと寄り添いたまい、喚びつつつけたまい、待ち続けて下さっている姿に重なります。私たちは、「お前にあいたまい、助けたい」と憶い続けて下さっている阿弥陀仏を待

たせ続けてきて、今もなお待たせているのです。その仏が私とともに常にいます。その大悲の親のやるせなきお心を思えば「久遠劫来待ち兼ねる 親を哀れと思わんか」と歌われるのです。阿弥陀様は私に寄り添って喚びかけ、念じ続けていながら、私たちが一向に知らぬ顔です。振り向きもせず親を無視し見捨て続けている。それが私の久遠劫来の姿です。その様な私たちをあきれもせず見限りもせず大慈悲をそそぎたもう。そんな慈悲の親がましますと聞いて、その「親を哀れと思うなら ああじゃこうじやを振りすてて 南無阿弥陀仏となきやさんせ」と仰せられるのです。

「ああじゃこうじやを振りすてて」とは、闇の底に沈んでいる我たちを久遠劫来「助けるぞたのめ」と喚びかけたもう大悲の親の仰せを聞かせていたのだらば、もはや親を泣かせるようなダダをこねず、いらざるごさかし我が計らいをさしおいて、素直に「有難う、阿弥陀様なればこそ」と弥陀をたのみ、ナムアマダブツナムアマダブツと親の名を称える。「南無阿弥陀仏となきやさんせ」。称えることが鳴くこと。鳴くというのは念仏申すことですが、同時に内心は親の大悲に泣いているのです。

こちらが求める前、気がつく前からずっと私を心配し、私の苦悩を大悲して、「助けん」と立ち上がって下さった阿弥陀仏。その阿弥陀仏によくやぐであって、「阿弥陀様ようこそ、こんな私のために」と、ナムアマダブツと親の名をよび、ナムアマダブツと親の名を聞く。親子の名のりをし、親の心と子の心が通い合う。阿弥陀仏は「ようこそ、私に気がついてくれた、ようこそ助かってくれた。私も嬉しい」と。阿弥陀様にであって一番喜び給うのは阿弥陀仏ご自身でありましょう。「やれやれやれやれとまことの親に気がついてくれたか」と、ここに「親も助かる子も樂や」となるのでしよう。(了)

【住職つれづれ日誌】

九月に入りオリピック放送が衛星放送などで詳しく報道されるとついテレビに釘付けになって、寺報の原稿作りも遅れがちである。勝ち負けのメダル獲得競争は見ても疲れる。身を入れて見てしまい、結構興奮するからで

あろう。ただ痛感するのは、勝ち負けの世界は面白いに違いないが、心の安らぐ世界ではない。

日本は女性選手の活躍が目立つ。高橋尚子選手などを見ていると、近年沈んでいる日本の活力は女性から起るのではな

【電話相談室】

(秘密厳守・匿名可・無料)

(時間)

午前8時より午後10時まで

(電話)

0798-41-5346

(相談内容)

人生上のいろいろな悩み・
信仰上の相談・仏事の相談
*相談員が留守の時がありますので予めご承知ください。

*九月三日韓国旅行から帰る。慶州の石窟庵の石仏に感動。韓国の人が世界一の仏像と誇るだけのものではなかった。今の韓国は経済状態は依然良くないようだが、人々の生活に活気があり、南北統一の希望も夢ではなくなってきたこともあって表情は明るかった。

*九月四日。大阪教区の所長巡回。大阪教区の教化体制の組み替え・阪神大震災七回忌の法要の事・本願寺の瓦の吹き替えの寄付などが話題に上った。

*九月十七日。日曜日であるが法務が無いので、久しぶりに芦屋会館へ聴聞に行く。梯師の「悪人正機の源流」というお話で、新しい資料が紹介され興味をそそられた。

*九月二十二日。念佛寺彼岸会。定例の二十二日のお参りに、遠近各地から初めて来てくださった方が四名もあった。しかも、皆さん聞法に非常に熱心なお方ばかりである。私の方が「しっかり聞法せよ」とご催促を受ける思いである。金子先生が、法話は諸仏に領解を聞いていただくことだと

言われたのを思い出す。
*九月二十三日。法友との勉強会発足に誘われていたが、このところのお参りの忙しさでいささか疲れがたまり、欠席させていただく。五十も半ばになるとなかなか疲れがとれない。(了)